浅間山エコ学習を通じた地域活性化プロジェクト

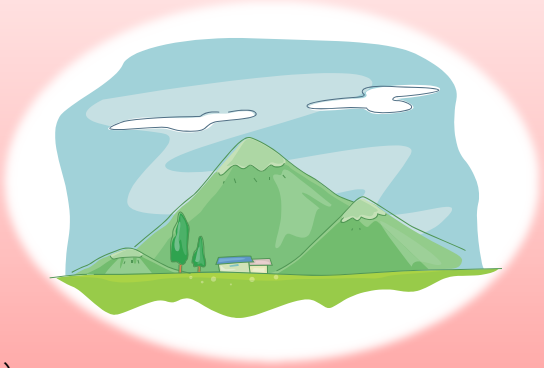
～浅間山について～
〇浅間山は、日本百名山の一つでもあり、日本を代表する活火山として名高い。
〇自然の恩恵と噴火災害の2つの顔を持つ浅間山だが、近年の登山ブームや火山として特徴的で雄大な姿を楽しむため、たくさんの登山客が訪れている。

～現状と課題～
●動植物等について説明できるガイドは多いが、専門的な知識を必要とする活火山としての浅間山の魅力を説明できるガイドは少ない。
●ガイドの同行なしに登る登山客の多くは、規制範囲を超えて火口のへりまで行っており、安全性が懸念される。
●浅間山北側には1783年の溶岩流など、南側では見ることのできない火山に関わる様々な自然環境が存在するが、浅間山の登山道は長野県側からのみで、群馬県側からの登山道が整備されていない。

プロジェクトの目的

1. **浅間山エコ学習の推進による人づくりと地域振興**
   ⇒浅間山登山ルートにおける見どころや学習項目の抽出
   ⇒火山の魅力も伝えられる浅間山エコガイドの育成手法の開発
   ⇒浅間山エコガイド（主に、地域の子どもからお年寄りまでを幅広く対象とする）の育成
   ⇒登山客の集客による地域の活性化

2. **登山客の安心安全を守る仕組みづくり**
   ⇒浅間山における嬬恋ルートの開発（避難路、自然散策路）
   ⇒安心安全のための登山ルールの作成（入下山基準や既存のポータルサイトの活用等）



＜本プロジェクトが目指す成果＞

- **浅間山エコガイドの育成手法の開発及びその育成**
- **安心安全を確保した登山道・嬬恋村ルートの開発と登山ルールの作成**

さらに、これらの取組みが他の地域のモデルとなるよう、全国に向けて発信する
（例：ホームページや広報誌等を用いて情報発信　など）

浅間山エコ学習とは・・・
地元住民や登山客を対象に、浅間山（山麓や登山道）を通じて知ることができる地域の魅力（火山、動植物や特色ある地形等の自然環境、地域文化など）について学ぶ。

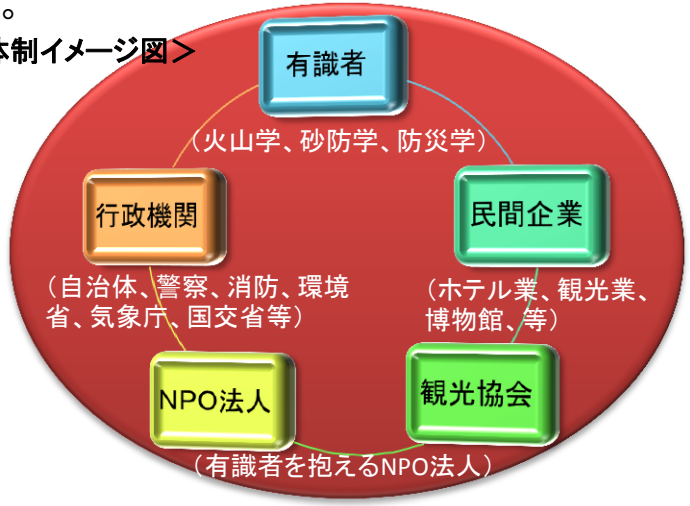
浅間山エコ学習を通じた地域活性化プロジェクト（進め方）

【実施体制】

●嬬恋村、NPO法人 浅間・吾妻エコツーリズム協会が協働で実施。

●事業を円滑に進めるため、「協議会」を設置し、検討を進める。

＜協議会の体制イメージ図＞



【有識者】藤井敏嗣東大名誉教授（火山学）、荒牧重雄東大名誉教授（火山学）、池谷浩砂防・地すべり技術センター研究顧問（砂防学）、松尾一郎環境防災機構理事（防災情報システム学）、横田崇気象庁気象研究所部長（防災学）

【行政機関】嬬恋村、長野原町、小諸市、御代田町、軽井沢町、群馬県警察本部（長野原警察署）、吾妻広域町村圏振興整備組合消防本部（嬬恋分署）、群馬県危機管理室、気象庁浅間山火山防災連絡事務所、林野庁吾妻森林管理署、環境省万座自然保護官事務所、国土交通省利根川水系砂防事務所

【民間機関】㈱プリンスホテル（鬼押し出園）、浅間山火山博物館、浅間山麓国際自然学校、浅間高原観光協会、NPO法人浅間・吾妻エコツーリズム協会

【アドバイザー】NPO法人環境防災総合政策研究機構※

※嬬恋村とこれまでにも交流があり、火山防災の専門家を有する「NPO法人環境防災総合政策研究機構」の協力を得て実施する。

【実施内容】

浅間山エコ学習の推進による人づくりと地域振興

・ガイド育成手法の開発
　－育成カリキュラムの検討
・浅間山エコガイドの育成
　－学習会の実施（ガイド向け）
　－（実践の場として）地域住民や登山客を対象としたイベントの開催

登山客の安心安全を守る仕組みづくり

・嬬恋村ルートの開発
　－関係機関を交えた開発に向けた検討
・登山ルールの作成
　－登山時における留意点等の抽出

【工程】

本プロジェクトは、2ヶ年で実施する。

＜平成23年度＞

10月：準備会（検討会）《内容：登山道ルート整備に向けたスケジュールおよび検討項目の確認、等》

1月：検討会（協議会）《内容：登山道の安全を守る仕組み、登山ルール作成に向けて、等》

2月：火山専門家を交えたガイド向け浅間山学習会《内容：登山時の留意点およびガイドポイントの確認、等》

3月：検討会（協議会）《内容：登山道ルートの確定、関係機関の役割、火山ガイド育成手法の検討、等》

＜平成24年度＞

検討会3回、野外観察会3回　実施予定

浅間山エコ学習を通じた地域活性化プロジェクト

≪ 浅間山とは ≫

- “アサマ”とはアイヌ語で「火を吹く燃える岩」の意であり、浅間山の小規模噴火は、一昔前まではそう珍しいことではなかった。**北麓（群馬県側）の民にとって、荒ぶる火の神 “浅間大明神” は畏怖の象徴であり、また心の拠りどころであった。**
- **世界でも有数の活火山**であり、地球の内部を露呈する数少ない場所、**特に北側には1783年の大噴火の爪痕（鬼押出し溶岩流など）を、今も顕著に残している。**
- 現在、深田久弥の「日本百名山」、田中澄江の「花の百名山」に選定されている、登山者にとって人気の山。年間の登山者数は5万人（要確認）を数える。

≪ 現在の北麓から見る浅間山の存在感 ≫

- かつての大災害を忘れてしまうほど、平穏な状態が長く続いている。
- 地元から登れる登山道もなく、近いが遠い山である。**まるでよその県の山のよう。**
- 観光事業所にとっても具体的な**誘客に繋がらなく**、あまり益をもたらさない存在。
- キャベツ農家及び観光事業者にとっては、**噴火による風評被害は困る。あまり話題にしたくない山。**

浅間山の存在は地域住民の深層意識から薄れ、地域住民と浅間山の関係が希薄になってきてしまっている。

≪ 現状と課題 ≫

- **地域住民の防災の心構えや、火山観測に関する知識などの喪失、未更新。**
- **正規の登山道が無いため、地元住民だけが知る秘密ルートで登山、「裏」の暗いイメージ。親から子供へ浅間山の素晴らしさが伝わっていかない。**
- **浅間山だからこそ生まれた景観や地域の宝が、その価値を知らない地元住民によってダメにされてしまったり、火山学習に最適な場所が、よく解らないので「立入禁止」にされてしまったりする。**
- **浅間山があってのキャベツ生産（土壌、気温、雨量など）、観光客の誘致（気候、雄大な景観）なのに、ちょっとした噴火で逆恨みしてしまう。**

浅間山エコ学習を通じた地域活性化プロジェクト

≪ 浅間山エコ学習を通じた地域活性化プロジェクト ≫

1. 浅間山エコ学習システムの構築と人づくり
   - 浅間火山をとりわけ深く学習することで、動植物だけでなく 火山についての専門的な知識を持つ浅間火山エコガイドの育成。
   - 学習内容（火山、岩石、気象、動物、植物、生態系、土壌、農業、林業、観光、健康、歴史伝統文化、安全対策、登山技術、おもてなし等）は有識者に関与してもらい、科学的エビデンスの裏付けがある学習内容にする。
     ―育成カリキュラム、浅間火山と暮らすハンドブックの編纂
   - 子供からお年寄りまで、幅広い地域住民を対象とし、地域住民と浅間山の絆を深め、地域を最も特徴づけている浅間山を「郷土の誇りの山」とする。

2. 登山客の安心安全を守る仕組みづくり
   - 浅間山北麓における登山ルート、浅間火山に親しむコースの開発。
   - 安心安全のための登山ルールの策定
     （入下山基準や既存のポータルサイトの活用）

≪ 目標とする成果 ≫

- 浅間山エコガイドの育成方法の開発、及び育成。
- 地域住民が世界的な火山・浅間山との精神的な繋がり、拠りを取り戻す。
- 浅間山北麓からの登山道の開発と登山ルールの作成。
- 登山客の誘致による観光振興－地域経済活性。

- さらに、この一連の取り組みが他地域のモデルとなるように、全国に向けて発信する（ホームページや広報誌等）。
- 全国にある「蓋をしている、地域と希薄になった観光資源」を、「地域の宝」として観光振興及び地域経済活性へと発展させる方法のヒントになれば幸い。

浅間山エコ学習を通じた地域活性化プロジェクト

－浅間山北麓の風景－

鬼押出し溶岩流が止まったあと。落差20m以上

まだ植生遷移が進んでいない場所

溶岩流の中を歩く

溶岩流西端、雪形“逆さ馬”ができる場所

浅間山エコ学習を通じた地域活性化プロジェクト
アウトプットイメージについて

人づくり

- 嬬恋ルートの開発
- 登山道運営体制の確立
- ガイド付きの登山手法の開発
- 既存のポータルサイトの活用

地域活性化

仕組づくり

- 浅間山エコガイドの育成
- ガイド育成プログラムの開発
- ガイド育成指導書の作成
- 生涯学習としての浅間山エコ学習の推進